



## 初年次ゼミナール覚書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005873">https://doi.org/10.24729/00005873</a>

## 初年次ゼミナール覚え書き

堀江 珠喜

2012年度から開始した初年次ゼミナールであるが、その2年前、教育研究推進機構の教授会でこの科目の設置について私は反対していた。目的も意義も成果も全く不明で、ただ半年の、学生にとっては無駄、教員にとっては負担がいたずらに増えるだけの改悪カリキュラムにしか思えなかったのである。しかし法人化されてからの教授会は、人事権はもとより、あらゆる決定権を失い、反論は時間と労力の浪費でしかない。結局は組織上層部の思うままに大学が運営されてゆく。そして大学上層部は文科省の思いつきに振り回される。あの「ゆとり教育」という実施される前からさまざまな弊害が予測され、実際には予想以上の学力低下をもたらすことになる制度の導入を決定したあの文科省に従うのである。ちなみに「ゆとり教育」のために近隣の私立大学では九九を知らず、新聞レベルの漢字も読めない学生がいると、教授が嘆いていた。本校では、さすがにそのような学生はいないが、英語の筆記体を学んでいない学生のいることを知ったのは、つい最近である。英語教育が重要といいながら、こんな基礎的な事柄を教育要綱から外すのが文科省である。そして、そのいいなりになるのが大学上層部なのである。

このように初年次ゼミナール実施に反対であった私が、その新カリキュラム初年から担当させられたのは、「あみだくじ」なるもので当たったからである。これは私が所属していない人間社会学部の教授会の折に、集まっていた教員たちが「公平」な仕事量の分担のために、この方法の採用を決めたのだ。ちょうど前期の試験期間中で、私にはこの方式決定が事後報告されたが反論するにはあまりにも急で忙しく、代理の教員にくじを引いてもらったら当たってしまったというのが真相である。

私がなぜこのような経緯について、くどいほどの説明をするのか。それは常々、仕事量は給料に比例するべきであるが、それぞれ適材適所でその得意分野で能力を発揮するべきだと考えているからだ。民間企業では当たり前のこの方法が、大学では通用しない。迷惑するのは将来のある学生たちである。

というわけで初年次ゼミナールには反対派の私であったが、学生には罪は無いので、担当する以上は彼らの近未来に役立つような、そして私ならではの授業にしたいと考えた。自分の専門分野に関することをテーマにしてもいいということだったが、所属、専門がそれぞれ異なる学生たちが集まり、しかも実際に最初の授業が始まってみなければ、どのような顔ぶれかは全くわからないのである。そこで私は、このゼミナールでは徹底した現場主義、つまり履修生に必要と思われること、彼らが興味を持ち将来的にも役立つと考えられることを見つけ出し、彼らの能力も考慮しながら授業で取り入れていくことにしたのである。

私のゼミナールのテーマは「将来のエリートを目指す者には何が必要か？——を考える」である。ある先生から、これはとても危険なテーマだと忠告された。とても優秀か、それともとんでもない学生が来る可能性があるらしいのだ。しかし優秀な、あるいはと

んでもない（個性的な）学生なら、まさに私好みである。そこでシラバスの授業目標にはこのように追記した——「将来、エリートになりたいと思わない者は、受講を遠慮していただきたい。まずウィキペディアで『堀江珠喜』を検索してください」。そして教科書は拙著『いい加減な人ほど英語ができる』で、「授業中の公用語は原則として、標準日本語または英語とする」と授業概要に追記した。関西弁や方言が悪いとは言わないが、全国的に一般論としてしかるべき場所では標準日本語を用いたほうが、有能とみなされるきらいがあるのは事実だ。従って私自身、関西地域だけに放送される番組や関西での講演では、親しみを抱いていただけるように関西のアクセントを用いるが、全国放送や関西以外での講演では標準語を使う。シラバスでこれだけのことを要求したので、向上心を持つ学生が全員とはいえないまでも多く集まった。ただし向上心はあるものの能力がそれに伴っていない者もいる。

4月最初の授業では男子8名、女子7名の全員が出席した。「エリートを目指す」とは言っても、エリートとはどんな人間をさすのかについては語っていない。ただひとつのイメージとして私は2012年1月25日号の日本版『ニューズウィーク』のグラビア「金持ちアメリカ 貧乏アメリカ」を見せた。そこには「見えない境界」としてニューヨークのエリートビジネスマンたちとホームレス女性が映っている。前者は仕立ての良いスーツを均整のとれた姿勢のいい体にまとっている。後者は肥満体に粗末な服をだらしなく着ている。典型的なアメリカの勝者と敗者だ。「あなた方が目指すのはどちらですか？このイメージを忘れないように」とだけ言って、それぞれの自己紹介を手短にさせた。私のゼミナールでは机を円状に移動させ皆が全員の姿を見ながらしゃべることができるようにした。これはまた自分が全員から常に見られていることでもある。この日は自己紹介の後、45分間の図書館ツアーに参加した。一年の授業が始まった最初の週なので、まだ設備利用については知らない者もいるに違いない。そう考えたのだが、さすがにエリートを目指す学生というべきか、すでに図書館を使ったことがあってこのツアーは退屈だったという者もいた。私にとってのこのツアーの第一目的は、実は学生たちの歩き方のチェックにあった。そのうち、エリートとして、しかるべき歩き方、座り方、立ち方について考え、実践させようと思っていたのだが、もし歩行困難者がいたなら計画を変更するつもりであった。これまで33年の大学教員人生において、もちろん身障者もいた。聴覚・視覚障害者については教務課から連絡を受けたことがあるが、歩行に多少の支障がある程度では情報が来ない。このツアーで観察した限りでは、身体にはなにも問題は無い。ただ、とてもだらだらと歩いている。私は「早く、さっさといらっしやい」と追い立てるように彼らを移動させねばならなかった。やはり、しかるべき歩き方のレッスンは必要である。

翌週は宿題の「エリートの条件10項目を考えてくる」からそのうちのベスト3を各自選ばせ配布した用紙に書かせた。宿題では単に10項目を考えるだけではなく、その理由も用意していなければならない。概して日本人は理由を聞かれて「なんとなく」と答えがちであるが、それでは国際社会では通じない。実際、「なんとなく」は英訳できない。かならず自分の発言には、そう考えるに至った理由が必要であることは、私はこのゼミナールだけでなく、英語のクラスでも指導し続けている。ベスト3を決めたとき

ろで、一人ずつその内容と理由を発表する。そこで異論があれば途中でも口を差し挟んでかまわない。日本人はディベートやディスカッションに慣れておらず、反論が反感を生み出しかねないが、欧米では議論が人間関係を壊すことは無い。それについての私自身の体験を話し、学生同士はもとより私に対しても遠慮せずに持論を述べるように指導した。

さまざまな意見が出たが、次の7項目にまとめられそうであった——英語力、広い人脈、情報収集・発信能力、向上心、判断・行動力、体力（健康管理能力）、遊び心（余裕）。さらにそこから二つの議題に絞ることのできるディスカッションが展開された。一つは「英語はエリートにとって必要か」もうひとつは「継続と切り替えは対立関係にあるか」ということで、これらについては、次回に持ち越して話し合うこととなった。その際、適当と思われる司会者を仕切り役として指名した。これについては皆それなりによく考えては来ていたが、ついこのあいだまで高校生あるいは予備校生だった学生に仕切り役を任せるのは無理だったかもしれない。積極的に発言する者は最後まで張り切っているが、うまく話し言葉で考えを伝えられない、あるいは議論が自分の思考力を超えていたとおぼしき学生は、退屈そうであった。この段階で、やはり所属学域の偏差値やどの入試で選ばれたかなどが、このような能力にも関係していると思われた。しかし学生にとっては、自分とは異なった、しかしながらそれにも一理ある意見を聞いたり、より優秀な同級生から触発され、分野を越えて親しくなるのに、このゼミナールは良い機会だったようだ。

クラブやサークルに入っていないければ分野の異なる学生との交流はしにくい。ましてや先輩と知り合うチャンスも無かろう。そこでこのゼミナールではTAの制度を利用し、工学部・綿野教授の協力で院生に二人来てもらい、プレゼンテーションにおけるパワーポイントの効果的な使い方を指導してもらうとともに、上級生として新入生の悩み事や相談事の話し相手になってもらった。この授業中だけで先輩後輩の関係が終わるか、その後の付き合いまで続かせるかは、個々の能力や価値観次第である。

さて学生のなかに英語でのゼミナールを希望する者がいた。私の後輩にあたる神戸女学院高等学部卒業生である。もとより依怙最良する気持ちはないが、我が母校（神戸女学院中学・高等学部）の同窓生には年代を越えて通じ合う気質があり過ぎる。波長が合うというべきか。神戸女学院高等学部の2年くらいになると日常英会話には不自由しないように教育されている。言いたいことも英語で話せるようになっているのが普通だ。従って私がゼミナールで話す英語くらい、彼女なら居眠りしながらでも理解するだろうし、また発言においても彼女の独り舞台になることは予想できる。神戸女学院大学の英文科教授なら、授業に積極的に参加しないほうが悪いとばかりに大部分の学生の理解度を無視してごく少数の発言者を優遇する。少なくとも私が学生のときには、そのようにして鍛えられた。おかげで大学2年の4月には、英語でのプレゼンテーションも平気で行ったものだ。それでこそそのグローバルスタンダード維持なのだが、さすがに初年次ゼミナールでは、そこまでの英語力を彼女以外の学生には期待できそうにない。しかし彼女の希望も叶えたい。そこでその次の「しかるべき歩き方、座り方、立ち方を考える」は英語で行うことにした。

広い教室（B3-201）を予約し、実際に歩いたり座ったり立ったりするのである。これならば身振りや手振りを使うので、英語のすべてが理解できなくても意向は伝わる。欧米のエリートたちは、このような動作の習得のために高額のレッスン料金を払いコーチを雇う。しかし若いときにその重要性を理解し身につけておくべきだと私は考える。初めはしんどくても、いざそれが習慣になれば、無意識のうちにそのように振る舞っているものだ。たとえば女性が椅子に座る場合、膝を合わせたほうが美しく知的に見えるに決まっている。幸い私は幼児の頃からこの点にはとても厳しく父に躰けられたので、たとえ2時間のディスカッションでパネリストになっても何の苦痛も無く膝を合わせたまま座り続けられる。もちろん授業中もしかりである。多分そのように骨格が成長したのであろう。だが私の女性同業者のなかには、壇上での座り方がだらしなくなる者が少なくない。おそらくは子供のときから勉強ばかりして、礼儀作法については学んでこなかったのだろう。しかしやはり、見かけは大事である。欧米のエリートと付き合うつもりなら、やはり彼らのエレガンスに負けない心掛けが必要である。ちなみに英国の上流階級なら7歳くらいの子供に社交ダンスを習わせ、美しい歩き方や正しい姿勢を会得させる。時間が許せば私もゼミナールで社交ダンスの基本くらいは教えたかった。

そこまでは叶わなかったが、スティービー・ワンダーの「ウーマン・イン・レッド」をかけ、リズムカルに歩くレッスンはなかなか好評であった。この授業以降、学生たちは政治家やいわゆるトップとおぼしき方々の歩き方、座り方、立ち方をチェックするようになり、また自分たちも気がつかないうちに誰かに見られている、そして社会的地位が上げれば上がるほどそうなることを理解したようだ。

その次の授業もなかなか好評だったのだが、本大学の今年度前期に受けている科目のなかで、このゼミナール以外で「好きな授業・嫌いな授業」について具体的に選び出し、その理由を考えて来させた。彼らの発言はオフレコとし、名誉毀損や侮辱罪などは考えずに自由に述べさせた。悪口大会の様相も否定はできないが、学生たちは日頃の不満を表すことでストレスを解消するとともに、他人に自分の言いたいことを伝える難しさや工夫について学ぶのである。「なぜその授業がつまらないのか、どうすれば学生にとってより興味深いものになりうるのか」——単なる批判からこのような建設的な考え方に展開することにより、どんな教師からも学べることを認識させた。問題は学ぶ側の積極性なのだ。

私はこのゼミナールでも、学生の積極性を重んじた。前週に出した課題については全員に通り返言させるが、その後は自由討論である。司会者を決めることもあるが、自然のうちに私の後輩が仕切っていることも多い。このゼミナールの「担当者心得」には「教えたいた気持ちを禁欲的に抑える」とあったが、常識的知識が学生たちに欠落しているとわかったときや議論が袋小路に入ったときには、やはり一言アドバイスをするのが教員の義務だと思われる。なにしろ、彼らは今年3月まで受験最優先で生活してきたのである。受験に関係ないことを知らずに育っていても不思議ではない。いっぽう「担当者心得」にも学生の自発的・能動的学習が強調されているので、欠席者に対して私からは出席に替わるレポート提出を求めなかった。だが学生によっては自主的に書いてきて皆の前で私に渡したし、また学生によっては欠席の連絡も寄越さない。（第1週めに私

のメールアドレスと携帯電話番号は教えてあるにもかかわらずである。) このような学生の態度が採点に影響をあたえることなど、いちいち「教え」なくとも常識的に考えれば明らかである。それがわからなかった学生は自分の成績を見て考えることになるだろう。競争社会で生き抜かなければエリートにはなれない。このゼミナールで無断欠席を平気でするような学生は、エリートへのスタート地点にすら立てまい。しかしそれは彼らの自己責任なのだ。

ゼミナールではゲストスピーカーを招いても良いとのことであったので、国際交流担当副学長の寺迫先生においでいただき、本校の国際交流について30分お話しいただくよう計画した。お忙しい副学長なので、6月第1木曜の午後1時からスピーチは30分、もしお時間が許せば学生からの質問を受け付けていただきたい旨、お願いしたのである。それに先立ち、5月最終ゼミナールでは、それぞれが本校あるいは他校の国際交流について、あるいは寺迫副学長について、あるいは大学に限らず国際交流について、調べ考えてきたことについて、意見・情報交換をした。ウィキペディアでは調べられなかったらしいが、フェイスブックをチェックした学生が「寺迫副学長には友達が多いらしい」と発言したので、「友達」の定義とは何かという議論になりかけた。この日のテーマはあくまで翌週のための予習なので、「友達」についてはまた日を改めて考えようということになったが、結局日程の都合上、実施できなかったのは残念である。というのも目下、特に東京のマスコミでは「友達」がウェブ全盛期における問題提起のキーワードのひとつで、私自身このテーマでテレビ出演したことがあったのだ。

ただし、現実的には、この頃には私のゼミナールの学生たちは私抜きで仲間付き合いし始めていた。「私抜き」を寂しく思う教員もいるだろうが、私には好都合であった。原則、私は学生とキャンパス外での付き合いは望まない。事故が起こったときの責任の所在も問題にされたくないし、なにより定年も近づくとも体力も若いときのようには無く自分の研究時間を取られたくはないのである。従って、私の後輩学生が自主的に幹事となりコンパをしようとしていることは耳にしたが、詳しくは尋ねなかった。知れば「未成年は飲酒禁止」などと言わなければなるまい。大学生になれば飲酒を多目に見る風潮に私は反対である。私自身が大学生のときにどうであれ、今、教育者の立場から法律違反を見逃すわけにはゆかない。焼き肉食べ放題の店にアルコールが置いてあるのか、行ったことも無い私は知らないのである。

授業で学生たちが楽しみにしていたゲストスピーカーの日がやってきた。例によって机を円形に並べて副学長を待つ。その間に、私は次のような注意事項のコピーを彼らに配った。

1. 自分自身を有能に見せる、思わせる工夫をする。(座り方、聞いているときの表情、メモの取り方、発言者は発言の仕方、等)
2. 副学長入室・退室時には、その場で立って拍手で送迎。
3. 副学長が座られてから座る。

4. 副学長のお話が終わり、質問の時間になれば、遠慮なく、ただし次の点に注意して質問する。

(1) 初回発言のときには、自分の所属と名前を言い、本日の礼を短く述べてから質問する。(再発言のときには、もちろん不要)

例 「\_\_\_\_\_の\_\_\_\_\_でございます。本日は大変興味深いお話をありがとうございました。私の質問は\_\_\_\_\_」

(2) 敬語を使うように。副学長に対し尊敬語、自分については謙譲語を使用。

- ・自分のことは「私（わたくし）」と言う。(男性も同様)
- ・自分の親については「お母さん」ではなく「母」などと言い敬称をつけない。

例 「私の母が若い頃\_\_\_\_\_」

- ・若者流行語は遠慮する。(マジ、ぶっちゃけ、ヤバイ、等々)

(3) 大学生は「生徒」ではなく「学生」——これを間違えただけで相手に馬鹿にされます。なおロサンゼルスは「ロス」ではなく「L.A. (エルエイ)」、レオナルド・ダ・ヴィンチは「ダ・ヴィンチ」ではなく「レオナルド」

(4) 質問に答えてくださった場合、「ありがとうございました」を忘れずに。

5. 来週にレポート提出。テーマは「寺迫副学長をお迎えして」。字数・視点は自由だが、文体は常識的な大人の文体（日本語）使用。ただし内容は常識にとらわれる必要なし。「そつ」が無いより独自の視点や観察力、分析力、結論を期待する。(Where, When, Who, What, Why, How は説明・レポートの基本と心得ること。)

わざわざゼミナールで言わなくても家庭教育やこれまでの学校教育で学んでいて当然のことばかりだが、ゲストスピーカーに対する失礼や、またゲストスピーカーから彼らが軽視されることは私のプライドが許さないもので、特にマナーについては強く念押しした。結果は、少なくとも礼儀においては合格点を渡せるレベルに達していたと思われる。副学長の話が予定30分から80分と長引いたが、学生の姿勢は崩れなかった。質問時間が僅かしかなかったのも、指名したわけではないが私の後輩学生が前述の注意事項を守りながら積極的に尋ね、副学長の答えに対し「反論するようで申し訳ないのですが」と食い下がったのには、神戸女学院高等学部気質を感じずにはいられなかった。心の中では拍手するも、後日、彼女には「貴女には私と共通するところがある。日本を出て欧米で活躍することを考えた方が良い。日本にいるなら、欧米人が日本支社長でいる外資系企業でないと、日本の男性社会では難しい」とアドバイスした。聡明な彼女はすでにそのことには気付いていて、当然のように「私は日本のオジサン社会には向きません」と

将来を見据えていた。神戸女学院は140年前に二人のアメリカ人女性がアメリカ人たちの寄付金で設立した学校だ。本校の創基より10年古い歴史を持つ母校は、日本の男性社会に適合しにくいグローバルな人材を輩出するのが校風といえよう。

ゲストスピーカーの授業直後にメールで謝辞を送ったところ、副学長からは次のようなリップサービス・メールが返信されてきた——「さすがエリートになることを目指す学生たちだけあって、みな、いい表情をしていましたね。質のいい学生たちを集めておられるように思いました。堀江先生の手腕ですね」。ひとまずは演出成功といえそうであった。

この翌週にはレポートを集めるが、非常に整った形式からメモ書きの域を出ないもの、言葉遣いについてもさまざまであった。だが、執筆においては学生それぞれの自覚による自習が重要と思い、まず体裁については全員の提出物を並べ、「もし重要な仕事を任せることになったら、どんなレポートを提出する人に任せたいと思いますか。内容はともかくとして、まずは形式で選んでごらんください。その答えは聞きませんが、次回からの自分のレポートに反映させるように」と言うにとどめた。また文章についてはとりあえず私の紀要論文「QM2における英語について」の抜き刷りを全員に渡し、「これは論文としては比較的柔らかい文章ではあるけれど、まずはこのくらいの言葉遣いはできるように。常にしかるべき書き言葉を学び取ることが大事。良いと思った言葉は盗んで自分で使えるようにする」と指導するが、その効果は学期末のレポートに表れた者もいるし、全くと言っていいほど気にしない学生もいた。

材料と方法は示したのだから、実践の有無は本人次第である。半年のゼミナールではこれ以上はできない。さらに「アカハラ」という言葉が氾濫する現在、個人指導はよほど気をつけなければならない。学生から要請があれば行すが、でなければ私から呼び出すことはリスクが大きい。

この日のレポートについて、すなわち寺迫副学長のスピーチについては、この一週間後の授業で話し合うこととした。私がレポートを読み適切なコメントを考える時間が必要だからである。そのため6月の第2木曜日は、東北の被災地でコンサートを企画したある女性歌手のドキュメント・テレビ番組DVDを観せ批評させることにした。私がテレビ大阪の番組審議会委員を10年以上務めているので、その仕事としての番組の見方を紹介するとともに、問題意識を持ってメディアに接する姿勢を学んで欲しいと思ったからだ。私のこの思いが伝わったのか、それとも芸能界への不信感があったのか、実際の番組審議会では交わされないような鋭い批判がなされた。つまりこの歌手が被災地のためにコンサートをしたのではなく、被災地の人々が、この歌手のコンサートのために手助けしてあげたととらえたのである。そうして地元の方々にお世話になりながら、この歌手は偉そうにしているのが不愉快との意見もあった。災害ボランティア活動の難しさを考えるのにも良い機会になったと思われる。

この翌週に予定していた「寺迫副学長をお迎えして」についてのディスカッションは、私の左目緊急手術のため、さらに一週間後に延期したが、ゲストスピーカーの話し方、内容、本学の国際交流の問題点やせつかく予習して臨んだ授業であったのに自分たちの知識がいい加減であったことの反省や、質問しなかったことの後悔など、さまざまな議



論が続いた。学長の方針『『窓』のある大学』という表現には「外に向かって開く、外の風が入る」との副学長の説明があったが、「窓」からは出入りできないので、「扉」のほうが国際交流には適した言葉であるとの発言に皆の同意を得た。でなければ国際交流ではなく「窓際交流」になろう。

おおむね好評だったのは、副学長が皆の緊張をほぐすべくゴルバチョフ人形を持参されたことだ。ただし学生の年齢から考えて、すぐにゴルビーとわかった者はどのくらいいただろうか。「ここの痣が特徴です」と副学長が説明され学生たちは頷いていた。けれども私はこの人形を見たとき、ひとつの心配事を胸に抱いた。そのことはこのディスカッションで学生たちに静かにこう伝えた——「私は大学という教育機関で教えて33年になります。過去に、顔に大きな痣のある女子学生を二人教えました。ですからあのような人形を、どんな学生がいるかわからない状態で、見せびらかすように持って行くことはできません。もしひとりでも、顔に痣のある学生がこの場にいたら、その学生はもとより皆が居心地の悪い思いをするでしょう。また顔にはなくても、衣服で隠されたところに痣があって悩んでいる方がいるかもしれません。我々は悪気なしに他人の心を傷つけることがあります。上に立つ者ほど、その可能性を考え配慮する必要があります。今後は皆さん方も気を付けてください。面白ければ良いというものではありません」(なお、休講については同週の土曜日に補講し、英語の発音と英語と米語の発音の違い、英語の音読方法について教える機会を得た。)

7月第1木曜日は、私が教科書として選んだ拙著『いい加減な人ほど英語ができる』から、それぞれどんなことを学んだかについて、全員に発言してもらった。具体的に自分に役立つような事を見つけて来させ、発表させるのである。「私は左目が不自由になり、おそらく単著書き下ろし単行本は今年7月14日出版の拙著『蛇のファッション考』が最後になると思います。それは研究者にとっては、とても気が滅入ることなので、どうぞいいところを見つけて私を励ましてくださいな」との要望が理解されたのか、それともけなすと採点に影響すると用心したのか、この日はホメゴロシ大会、仲人口練習となった。それにしても着眼点がそれぞれに違うのが面白かった。どうやらゼミナールも3ヵ月経つと、私が担当者であるかぎり人並みの発言ではプラス点に結びつかないとわかったのだろう。個性のアピール、自分ならではの発言の重要性を感じ始めたようだ。日本では残念ながら個性的だと優等生とみなされないことが多いのだが、欧米ではこのオリジナリティが無ければ存在意義が無いのも同然である。

この日、学生たちに強調したのは、しかるべき出版社から刊行されるのは「売れる文章」と「売れる内容」だからだということである。つまり私が書いたものがビジネス界で「商品」として認められたということであり、決して学問的な評価とは同じではない。幸いに、私には出版物があり、それらをマスコミが取り上げてくれることがあるので、(日本の多くの男性たちが自分の名前が載ることを夢見ていた)交詢社の『日本紳士録』では助教授時代から紹介されてきたし、近年では知らないうちにウィキペディアに載っている。けれども、それは学問的価値とは直接関係は無い。本学の優秀な研究者でもウィキペディアに載っているとは限らないし、ましてや著書が無いのも不思議ではない。博士号を取得していない者もいる。今後、どんな教員の科目を履修してもそのこと

は心にとめておくように。ただし、学位を馬鹿にできるのは学位を取得している者だけ、著書を馬鹿にできるのも著書がある者だけ、ウィキペディアを馬鹿にできるのもそれに載っている者だけであることも事実だが、世の中とはそうしたものである。

ちょうど私のゼミナールの時間帯には公開講座でもある関西経済論が開講されている。4月の初めにこのプログラムを入手した私は、なんとかエリートを目指すゼミナールに役立ちそうな講師がいないかチェックした。そこで選んだのが7月19日、小林製薬株式会社的小林豊代表取締役社長の『創造と革新』である。べつに話はずまらなくても構わない。同族会社の御曹司社長の風貌や態度などを実際に見るだけでも、私のゼミナールで学んだ学生には勉強になるはずである。そこで4月初めに16人分の聴講を予約し、学生たちにはこの講演の前週には小林製薬あるいは小林豊氏について調べて来させ、情報・意見交換した。このときにも後輩学生が司会を積極的に引き受けてくれたが、ビジネスは受験科目にないので勝手が違うようであった。ひととおり皆の調査報告が終わった後で、私はこう質問した——「誰か株価の動きをチェックしていないの？ 上場会社を論じるにはまず株価でしょ。エーザイは最近上昇。武田はかつてに比べて悲惨。第一工業も仕手戦になるまでは上がる見込みなし。私が株を所有している製薬会社はこの3社だけだし、株式購入の気分にならないので小林はチェックしたことがないのだけだ」

実際この翌週の講演では、まず小林社長は会社紹介の5番目の項目に7月18日の終値が4300円であると説明した。ただしそれが高いのか安いのか、適正なのかについてのコメントはなかった。インサイダーにひっかかるからであろうか。しかし直近の値動きくらいには言及されてもよかったし、なにより、講演は12時55分から、つまり当日の株式市場前場終値がわかる時間なのに、前日の終値だけでは物足りない。ともかく学生が株価に対する私の前週のこだわりをこれで少しは理解してくれたことと思う。最近の学生は株式投資をしないのだろうか。私が神戸女学院大生時代には、すでに証券会社に口座をもっていたし、そのような友人もいた。ゆとり教育世代のくせに今の学生には、そんなゆとりもないようだ。

「小林社長の講演を聴いて」について話し合い、テストがわりにこのゼミナールで学んだことを書くのを最終授業の予定にしていたのだが、関西電力の計画停電で休講になる可能性があるとの連絡が入り、この2項目についてはレポートにして7月26日の昼休みにB3-304にて私に提出とした。停電は起きないとの事務方の話であったが、それならば計画停電による休講表など作成し配る必要はあるまい。そのような書類を受け取った限り、授業担当者としては最悪の場合に混乱が生じないように配慮する責任がある。ましてや定期試験中である。15名中14名が時間内に持ってきたが、一名からは何の連絡もないので不可とした。前述のように学生から私へはすぐに連絡が取れるように携帯電話番号まで教えてあるにもかかわらずである。他の科目ならともかく、エリートを目指す者としては失格で当然であろう。

14名のレポートを読み、まだまだ彼らが子供であることを実感させられた。もっともそのようなこともあろうかと、レポートと引き換えに、このような一般論としての注意書きは渡したのだが——「要注意：民間企業数字のトリック 1、売り上げを伸ば

す最も簡単な方法は、他の会社を買収すること。(買収した会社の分だけ売り上げは増えるはず。) 2、増益 —— 所有不動産の売却益も含まれるので商品がよく売れているとは限らない。3、増配 —— 上記のように利益があるように見せて配当金を増やすこともある。同族会社では一族の所有株数が多く、配当も多い傾向がある。4、また『増益』だと銀行から融資を受けやすくなるので、なんとか数字をそのように合わせる場合もある。最悪、粉飾決算も行われる。くれぐれも見かけの数字に騙されないように！」 私のように文学専攻の大学教授でも、かつて実父や母方の祖父がそれぞれ同族会社を営んでいたことが、少しはゼミナールで役立ったかもしれない。

学生たちは、まだ子供であるが、それなりにこのゼミナールで学んでくれたようだ。各々に研究テーマを決めさせてプレゼンテーションをさせるという他のゼミナールでなされていたことは、あえてここではしなかった。理由は、彼らにはまだ能力的に無理だと判断したからだ。たぶん3名くらいはできるだろうが、他の学生には早すぎる。草野球がやっとの選手を甲子園に送り込んだらどうなるか？自信をなくし、やる気まで失うかもしれない。ディスカッションで自分の意見を10秒しか話せない者には10分のプレゼンテーションがどれほど苦痛か、いや、まずできまい。発言の時間と内容を毎回少しずつ充実したものにし、しゃべり方も学んでゆく —— まずそれをこなせてからのプレゼンテーションが望ましいと思われる。研究課題も、そう簡単には見つけれない。しかし発表の順番が回ってくるのでたいして興味の無いことをパソコンで調べてしゃべって終わりでは、聴いている方の時間ももったいない。プレゼンテーションこそなかったが、多くの時間をディスカッションに使ったので、人の意見を聴き、人に話す能力の向上にはつながったと信じている。

最も形式の整ったレポートを自発的に提出するある男子学生は「話す力」について、次のように書いた —— 「私は、約三ヵ月間のゼミの履修を通して、『話す力』の必要性を感じた。『話す力』は、受験のための勉強のようなインプットではなく、アウトプットを行う力だ。また、九年間の義務養育と三年間の高校生活では全く学習しなかったものである。私は、自分が考えていることを的確に正しい言葉で話すのはとても難しく感じた。同時に、この力が社会において一番必要な力であり、在学中に鍛えなければいけない力だと感じた。」また「ゼミナールでディスカッションをすることでゼミの仲間とも仲良くなる事ができ、貴重な仲間ができた」と書いた女子学生もいた。このゼミナールで「自分が思っていたよりもディスカッションに参加するのが苦手なタイプだと気づくことができた」と述べながらも彼女は「皆で意見を出し合うというのは刺激的で楽しかった」と言う。さらに「人前で話すことに自信があったつもり」だったある女子学生は、他の優秀な学生の発言力に圧倒されながらも、これが「一番楽しい授業」で素晴らしい仲間から多くのことを学んだようである。出会いに感謝する学生は他にもいた。所属の異なる学生をどうまとめれば良いかという心配は杞憂に終わったのである。

いっぽうある男子学生は「パワーポイントを使ったプレゼン形式ではなく机を円に並べる授業形式はディベートすることでとても授業に集中でき、他の授業と比べて90分経つのが本当に早く感じました」とコメントした。時間が早く経つと実感したのは私も同様である。ある女子学生も「1度も休みたいと思わなかったし、90分があつという

間に過ぎる唯一の授業でした」と言う。さらには「楽しくて、いつも友人に報告して自慢していました」とか。良い意味で話題になることは嬉しい結果である。

もともと「あみだくじ」で当たってなかば嫌嫌始めた初年次ゼミナール反対派の私ではあったが、担当しているうちに半年では短すぎると感じた。夏休みを間に挟めば課題を見つけて自由研究させ後期に発表させることもできよう。また各学生の能力もやっと7月の終わり頃になってわかりかけてきた。レポートの形式はひどいし文書も下手だが、発想にオリジナリティがある男子学生もいる。ちなみにこの学生は小林社長が常に変革し続ける重要性を説きながら後継者について「うちは娘しかいないので継がせられない」との旨発言したことについて、「女性社長は今の時代、珍しくない。それでもまだ社長といったら男という意識が残っているのだろうか。私は少し淋しい気持ちでした」と書いた。この点は私も「変革」といいながら昔ながらの保守的な経営体質については全く気付いていない社長の論理矛盾にひどく違和感を抱いたのだが、7人もいる女子学生は誰もこれについて何も思わず、男子学生がこうコメントしたのは意外であった。また普段の発言は積極的で理論的であるのに、レポートではその能力が活かしきれていない学生もいる。優れた能力をさらに伸ばし、苦手なところをアドバイスするのに半年間では足りない。とはいえ成長期にある学生を一人の教授の力で完成させることなどできないのだから、知的刺激を与え、仲間を見つけさせ、何事にも前もって調査し分析して考えることの重要性に気付かせたなら、とりあえず初年次ゼミナールは成功した、意義があったと思いたいのである。最後に私が学生たちに言った事——「エリートの定義については話し合いませんでしたが、皆さん方がエリートを目指すなら、当面の目標としては、私、堀江珠喜を越えるように」。